健康教室

大丈夫？子宮がん

北九州市立若松病院
産婦人科部長　高島　健
若松区白山1-8-3 ☎761～3936

最近、テレビや雑誌で子宮がんの話題がよく登場します。妊娠したことをきっかけに子宮頸がんが見つかったタレントさん、子宮体がんの肝臓への転移により急逝したニュースキャスター。

子宮がんは、がんができる場所の違いから、子宮頸がんと子宮体がんに大別されます。子宮頸がんは子宮の一部分が膣のなかに顔を出しているところにでき、子宮がんの約85％を占めます。

子宮体がんは子宮の奥のほうの子宮内膜（生理は子宮内膜が出血する現象です）にでき、子宮がんの約15％を占めます。どちらも、正常な組織からいきなりがんが発生せず、正常とがんの中間の前癌病変がまず出現してがんに移行します。正常からがんになるまでに時間がかかるので、早期発見が十分可能で大変重要なのです。

子宮頸がんになりやすい年齢層は40歳代が一番多く、50歳代、30歳代の順になります。

検査は子宮頸部の表面を綿棒などでこすって細胞をとる細胞診をおこないます。痛くない簡単な検査です。

日本では毎年1万5千人が新たに子宮頸がんにかかっています。

進行がんで見つかった方の殆どは子宮がん検診を定期的に受けていなかった方です。「子宮がん検診」は子宮頸がんの検診で、子宮がん検診実施医療機関のステッカーが貼ってある医院・病院で実施されます（平成13年7月1日～10月31日と平成14年1月14日～3月31日）。1年に1回は「子宮がん検診」を受けることを強くお勧めいたします。

しかし、60歳以上や20歳代にも発生します。

性交を始めた年齢が若かったり、本人および夫の性交人数が多い場合に子宮頸がんになりやすいといわれています。自覚症状としては不正性器出血がありますが、初期がんでは出血がないことのほうが普通です。

子宮体がんは、肥満、糖尿病、生理不順、喫煙、出産したことがない方に多いとされ現代、増加傾向にあります。子宮体がんの4人に3人は閉経前の方です。自覚症状は不正性器出血です。検査は子宮の奥に細い棒を入れて子宮内膜の細胞を取ってきて調べる細胞診検査や子宮内膜の状態をみる超音波検査を行います。卵巣がんも最近増加しているようです。自覚症状は、下腹がでてきたり、お腹がはった感じが続いたり、スカートがきつくなったりします。診断は超音波検査で行います。いわゆる「子宮がん検診」には子宮体がんや卵巣がんの検診は含まれませんので、ご心配な方はお近くの産婦人科にご相談ください。